

第 2 章

北部における選挙

近藤 則夫

本章では北部インドの諸州における選挙を分析する。本章で扱う州はジャンムー・カシミール州を除けば、ヒンディー語話者が多数を占める、いわゆる「ヒンディー・ベルト」地域と呼ばれる州である。ヒンディー・ベルト地域は人口密集地域であるため多くの議席をもち、その意味で選挙の勝敗を大きく左右する。本章で後述するように、ウッタル・プラデーシュ州などでモディ・ウェーヴの影響が強く現れたことがインド人民党(BJP)の勝利に大きく貢献することになる。

1. ウッタル・プラデーシュ州：既成政党に対する失望が生んだ BJP 大勝

ウッタル・プラデーシュ州(UP 州)は 2011 年人口センサスで約 2 億人を数えるインド最大の州である。同州は単に人口が多だけでなく、さまざまな宗教、カーストが多様な社会構造をつくり出している。たとえば、指定カースト(SCs)人口は 20.6%、宗教別人口は、ヒンドゥーが 80.6%、ムスリムが 18.5%である⁽¹⁾。地域的差異が大きく一概にはいえないが、社会経済的には後進州であり、たとえば州平均の識字率は 57.3%である。このような複雑で後進的な社会構造、そして中央政治との近接性という要因から、UP 州の政治は流動性が高いことが特徴である⁽²⁾。州政治は 1993 年から 2007 年までは、中間的カーストであるヤーダヴやムスリムを支持基盤とする社会主義党(SP)、チャマールなど SCs をおもな支持基盤とする多数者社会党(BSP)、そして高カーストや一部のその他後進階級(OBCs)を支持基盤とするインド人民党(BJP)、およびかつての広い支持層を失い低落した会議派に政党支持が分裂し、どの政党も単独過半数を得られず、合従連衡を繰り返し政権は安定しなかった。しかし度重なる短命政権と大統領統治という政権不安は有権者の嫌気をさそい

2007年の州議会選挙では BSP が、次の 2012年の選挙では SP が単独過半数を確保した。

「大統領統治」とは州政権が正常に機能していないと中央政府が判断したときに中央政府が州政府をその傘下におく制度である⁽³⁾。州政権自体は 2007年以降安定している。ちなみに 2012年の州議会選挙での主要政党の得票率は SP が 29.1%、BSP が 25.9%、BJP が 15.0%、会議派が 11.7%であった。

今回の選挙では BJP の勢いを SP、BSP、会議派がどれだけ阻止できるかが焦点であった。BJP は大票田である UP 州を重視し、モディと密接な関係にあるアミット・シャール(選挙後 BJP 総裁)を州担当とし、また、おもにクルミー・カーストを支持基盤とする地域政党である「我々の党」(Apna Dal)と選挙協力を組んで選挙に臨んだ。モディ自身もヴァラナシーから出馬した。BJP の選挙キャンペーンの特徴はモディ、そして、「開発」を前面に出したことである。しかし、キャンペーンでもうひとつ無視できない点は、ヒンドゥー大衆と他の宗教コミュニティの対立感情を煽るような言動を行い、ヒンドゥー票をまとめようとしたことである。民族奉仕団(RSS)などもこのようなキャンペーンを積極的に支援した。4月6日には UP 州警察はアミット・シャールに対してムザッファルナガルで「ヘイト・スピーチ」を行ったとして告発状を出している。ムザッファルナガルでは去年9月にヒンドゥー対ムスリムの宗派暴動が起これり 33名あまりの死者が発生している。この暴動により西部ではコミュニティ間の緊張が続いている状況があったからである。

会議派は西部で、アジット・シン率いる民族ローク・ダルと選挙協力を行った。BSP との協力も事前に協議されたが妥協がなかった。会議派にとっても UP 州での党勢回復は重要課題であり、ラーフールなどを前面に立てて貧困緩和の実績をアピールするなど懸命なキャンペーンを行ったが、与党の実績に対する選挙民の評価は厳しいものであった。

州政権につく SP は福祉政策、宗派暴動の広がり阻止など州政権の実績を強調し、一方 BJP を、社会を分断するものとして非難した。また、同党議長であるムラーヤム・シン・ヤーダヴは選挙後政党が分裂すれば同党が重要な役割を果たすと同党の重要性を強調した。

BSP は 2012年の州議会選挙で州政権を失った後、党勢は退潮傾向にある。党首のマヤワティ(元州首相)はライバル政党を政権についても人々の生活に注意を払わず、選挙で約束したことの半分も実行していないと非難し、BJP についてはムスリムと後進階級の利益を考えないと批判したうえで、たとえ選挙後に第1党になったとしても BSP は協力しないと宣言した。

このような状況で迎えた今回の選挙は BJP の圧勝に終わった。表 2.1 のように BJP は 2009年の選挙時の得票率 17.5%から今回は 42.3%となり、議席は 10 議席から 71 議席と記録的な大勝となった。SP は 22.2%の得票率で、ムラーヤム・シン・ヤーダヴが出馬し

たマインプリとアーザムガルを含めて 5 議席を確保した。BSP は 19.6%を獲得したが 0 議席に終わった。会議派は総裁のソニア・ガンディー，副総裁のラーフール・ガンディーが当選したのみで惨敗に終わった。

表 2.1 から得票率の変化をみると BJP は、会議派や州西部のジャート・カーストなどに

表 2.1 ウッタル・プラデーシュ州における主要政党の連邦下院選挙の実績 (定数：80)

年	(議席, %)				
	社会主義党	BSP	BJP	会議派	民族ローク・ダル
2004	35 (26.7)	19 (24.7)	10 (22.2)	9 (12.0)	3 (4.5)
2009	23 (23.3)	20 (27.4)	10 (17.5)	21 (18.3)	5 (3.3)
2014	5 (22.2)	0 (19.6)	71 (42.3)	2 (7.5)	0 (0.9)

(出所) インド選挙委員会 (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>) の資料より筆者作成。

(注) () 内は得票率を表す。小政党，無所属の当選者については記載していない。

支持基盤をもつ民族ローク・ダル，そして BSP などから多くの票を奪ったと考えられる。この表からみれば BJP のウェーブをあまり受けなかったのは SP だけである。発展途上社会研究センター(CSDS)の世論調査を基にした推定によれば，BJP は伝統的な支持基盤である高カーストの約 7 割の支持を獲得し，また，数的にはボリューム層である OBCs から多くの支持を得た。たとえば後進的 OBCs の約 60%，先進的な OBCs のうち，クルミーやコエリでは 53%が BJP に投票したと推定されている。例外はヤーダヴでその 53%は伝統的支持政党である SP に投票したと推定される。SP のほかの大きな支持基盤であるムスリムからは，同党は 58%の支持を得た。また BSP については SCs のうちチャマール(ジャータヴ)は 68%とその支持は確保したが，他の階層の支持は大きく減らした。会議派はすべての階層で支持を大幅に減らしている(*The Hindu*, May 23, 2014)⁽⁴⁾。

BJP は全 UP 州で票を伸ばし，モディも当選した。地域的にはデリーに比較的に近い西部で大きく票を伸ばした。とりわけ，ムザッファルナガルやブランドシャハルではそれぞれ 59.0%，59.9%と非常に高い得票率を記録した。BJP の過去の得票率はこれらの選挙区では 2，3 割であるから異常に高い値である。大きな要因は上述のムザッファルナガルを中心に起こった宗派暴動の影響であろうと考えられる。この暴動によるコミュニティ間の緊張により，少数派ムスリムへの反発として多数派ヒンドゥー教徒の票が BJP に向かったと考えられる。モディ・ウェーブに加えてこのような要因が BJP 得票率の大幅増加をもたらしたことは間違いないだろう。

2. ビハール州：カースト政治のなかでの BJP の躍進

ビハール州は主要 28 州⁽⁵⁾のうち，最も後進的な州で，たとえば識字率は 50.4%(2011

年センサス), また, 年間一人当たり国民生産は 2012/13 年度で 2 万 8774 ルピー(名目値)で, インド平均の約 42%にすぎない⁽⁶⁾。そのような後進性は封建的で抑圧的な社会構造の存在と関連するが, 中部ビハールではそのような抑圧構造に対抗して「ナクサライト」あるいは「マオイスト」といわれる極左武装勢力の闘争も活発であった。しかし, 近年経済成長が顕著で, 純州内生産(SDP)の成長率は 2005/06 年度から 2012/13 年度の平均は 11.0%で, シッキム州やウッタラーカンド州を除けば主要州のなかでは最も高い成長率を示している。またこれは全インド平均 7.0%の約 1.58 倍に当たる⁽⁷⁾。人口構成は SCs が 15.9%, ムスリムが 16.5%を占める。

この州の政治と社会変動の伝統的な対立軸は, 高カースト, SCs や指定部族(STs), ムスリムが支持の中核を占める会議派に対する, 自作農民など中間カースト層の社会的台頭を代表するジャナター党またはその派生政党という軸であった。近年では次第に後者が優勢になってきたが, 中間カーストも分裂しており, 複数の政党がその代表として現れ, 複雑な状況を呈している⁽⁸⁾。2005 年の州議会選挙以降は, ニティシュ・クマールを州首相としてジャナター・ダル(統一派)(JD(U))が BJP の助けを得て選挙で勝利し, 州政権を掌握してきた。同州首相は有能でクリーンなイメージをもち, 最後進州ビハールの成長を近年大胆に進めてきた。JD(U)の最大の支持基盤は中間的な諸カーストである。

第 1 章で述べたように JD(U)は, モディが BJP の選挙を率いるという決定を嫌って 2013 年 6 月には BJP と袂を分かった。そのため選挙の行方は流動的となった。BJP は人民の力党(LJP)および 2013 年に創設された民族人民平等党と選挙協力を行った。それに対して会議派は民族ジャナター・ダル(RJD)と協力し選挙を戦った。

JD(U)は 2 月にはモディを賞賛した国会議員 5 名を除名するなど党を引き締めるとともに, 党は世俗主義を重視し多くの人々に問題視されるモディが選挙後に連邦首相になることは認めないと BJP を責め, 一方, 会議派率いる統一進歩連合(UPA)政権はビハールの発展に重点をおかなかつたとして非難した。一方, ヤーダヴなど中間的カーストを支持基盤とする民族ジャナター・ダル(RJD)のラッラー・プラサード・ヤーダヴは妻と娘を候補者にしたことから党内から反発を受け, 党内有力者ラーム・クリパル・ヤーダヴの離反と BJP への参加を招いた。ラッラーはモディをコミューナルであると非難し, 人々の結束を訴えた。会議派は中央の UPA 政権の開発実績をアピールした。

一方, BJP はモディが開発重視を訴えると同時に, カースト政治ではなく人々の結束を訴え, 高カーストだけでなく後進カーストなど幅広い層の支持を求めた。また, BJP が政権をとればビハール州に財政上優遇される特別カテゴリー州の地位を与えるなどと主張した。

JD(U)が BJP と袂を分かったことで主要政党のあいだではどの政党にも機会があると思われたが、結果的にみると BJP が最も効率的にその機会を利用したといえる。選挙結果で BJP は 29.4% の得票率を得て 22 議席, LJP は 6.4% で 6 議席を獲得した。LJP は BJP と協力することによって大きな成果を得たといえるだろう。RJD・会議派連合は 28.5% の得票率で RJD が 4 議席, 会議派が 2 議席という結果になった。表 2.2 の得票率の推移からみると、ヤーダヴ・カーストとムスリムという堅調な支持基盤を有する RJD が主要政党のなかでもモディ・ウェーヴに最も抗し得た政党であったと考えられる。JD(U)は 15.8% を得たが 2 議席しか得られず惨敗となった。

BJP との関係を解消したことが大きな敗因であったことは間違いない。

表2.2 ビハール州における主要政党の連邦下院選挙の実績(定数: 40)
(議席, %)

年	JD(U)	RJD	BJP	会議派	LJP
2004	6 (22.4)	22 (30.7)	5 (14.6)	3 (4.5)	4 (8.2)
2009	20 (24.0)	4 (19.3)	12 (13.9)	2 (10.3)	0 (6.5)
2014	2 (15.8)	4 (20.1)	22 (29.4)	2 (8.4)	6 (6.4)

(出所) インド選挙委員会 (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>) の資料より筆者作成。

(注) () 内は得票率を表す。

ビハール州ではカーストや宗教などの社会的亀裂が投票行動でも重要であることが特徴である。モディ・ウェーヴが及んだとはいえ、今回もその傾向が顕著であった。CSDS の調査によると推定では BJP・LJP 連合は高カーストで 78%, SCs のドゥーサド(パースワン)カーストで 68%, 後進的 OBCs のあいだで 53% の票を得ている。RJD・会議派連合はヤーダヴ・カーストのあいだで 64%, ムスリムの 64% の票を得たと推定されている。JD(U)はクルミーやコエリなどのカーストのあいだで 30% の支持を得たが、他の階層のあいだでは押しなべて低調であった(*The Hindu*, May 23, 2014)。

JD(U)州政権は惨敗の責任をとってニティシュ・クマールが州首相を辞任し、代わりにジタン・ラーム・マンジーが州首相についた。マンジーは SCs などダリトと呼ばれる被抑圧者の代表とみなされている。

3. マディヤ・プラデーシュ州: BJP 州政権に対する高い評価がもたらした BJP の大勝

マディヤ・プラデーシュ州は面積 30.8 万平方キロメートルで地理的に 2 番目に大きな州である。人口は 7263 万人を数え、うち、SCs が 15.6%, STs が 21.1% を占め、ムスリム人口は 6.4% である。また、識字率は 59% である。2000 年にチャッティースガル州が分離した後でも後進的な STs 人口を多く抱え、シンディア家など独立前からの藩王の子孫が名家として現在も大きな影響力を保つなど後進的な面がある。この州は森林資源、鉱物資

源に恵まれている州でもある。

マディヤ・プラデーシュ州では BJP と会議派の 2 大政党制が定着している。他の政党は今回も BSP, 庶民党などが多く候補者を立てたがその影響力は BJP と会議派には遠く及ばなかった。州政治は 2003 年の州議会選挙で BJP が勝って以来, BJP 州政権が続いている。2005 年から州首相を勤めるシヴラージ・シン・チョウハーンは州の開発を順調に進める有能でクリーンな政治家というイメージが広く定着している。たとえば BJP 政権が始めた女子出産手当など福祉政策はカーストや宗派を超えて人々に人気を博した。このようなチョウハーン BJP 州政権の実績から, 人々のあいだでは BJP が中央でも政権を握れば州の開発がさらに加速されるのではないかと期待があったとされる⁽⁹⁾。

マディヤ・プラデーシュ州でも BJP の選挙キャンペーンはモディを前面に出したものとなった。しかし, 他の州とちがってモディが前面に出る程度は相対的に小さかったとされる。そこには党内でモディとライバル関係にあるとみられているチョウハーン州首相や同州に基盤をもち同州首相と密接な関係にあるスシマ・スワラージの存在⁽¹⁰⁾があるとされる⁽¹¹⁾。しかしより大きな要因はチョウハーン州政権の実績を人々が高く評価し, それが BJP への支持につながっているからである。BJP は UPA 中央政権の失政を指摘し, また UPA 政権は同州へ差別的態度をとっていると非難し, チョウハーン州首相は, もし BJP が連邦政権につけば, 州の開発は加速するとアピールした。一方, 会議派は BJP 州政権を腐敗しているとして非難し, また, モディ・ウェーヴはこの州には及んでいないと強気の姿勢を示した。

選挙結果は, BJP が 29 議席中, 27 議席を獲得し, 昨年 12 月の州議会選挙に続いて圧勝した。スシマ・スワラージはヴィディシヤ選挙区から当選した。BJP の勝利の要因はモディ・ウェーヴによるところも大きい, チョウハーン州首相率いる BJP 州政権の実績が大きいと考えられている。会議派が勝てたのは UPA 政権で閣僚を務めたカマル・ナート, および名門シンディア家出身で UPA 政権の閣僚であったジョティラディティヤ・シンディアだけであった。いずれも選挙区に強い支持基盤を有している。

CSDS の調査では比較的教育的層のあいだで BJP 支持が多く, また最多カテゴリーである OBCs ではその支持率は, BJP67%, 会議派 19%であった(*The Hindu*, May 25, 2014)。STs も多数は BJP 支持であったと推定されており(*The Hindu*, June 9, 2014), 6 つある STs 選挙区ではすべて BJP が勝利した。ムスリムの多くが反 BJP であるとしても,

表2.3 マディヤ・プラデーシュ州における主要政党の連邦下院選挙の実績(定数: 29)

年	(議席, %)	
	BJP	会議派
2004	25 (48.1)	4 (34.1)
2009	16 (43.5)	12 (40.1)
2014	27 (54.0)	2 (34.9)

(出所) インド選挙委員会 (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>) の資料より筆者作成。

(注) () 内は得票率を表す。

以上の状況では **BJP** が敗北する可能性は低いものであった。

4. デリー首都圏：既成政党の失政をついた **BJP** の勝利と庶民党の後退

デリーは急速な人口増大が進む地域で 2011 年の人口は 1679 万人で都市化率は 97.5% である。また SCs 人口比率⁽¹²⁾は 16.8%，ムスリム人口比率は 11.7% で、いずれも全国平均より低い。デリーは連邦直轄領で 1952 年に州議会が設立されたが 1956 年に廃止されている。州議会が復活したのは 1991 年の第 69 次憲法改正および「1991 年デリー首都圏政府法」によって準知事を長として、一院制の議会(定数 70 議席)と州首相を備えることとなり、「デリー首都圏」として州に近い自治体となったときである⁽¹³⁾。デリー首都圏は急速な経済発展、移民の大規模な流入など変化が急激な地域で、そのため政党とカーストや宗派の関係もかなり流動的であることが特徴である。首都として政治社会の変化に敏感であることも政党政治の流動性を増大している。州議会選挙は 1993 年に初めて行われ **BJP** が勝利し 1998 年まで政権についたが、1998 年以降 3 回の州議会選挙で会議派が勝利し、2013 年までシーラ・ディキシットを州首相として会議派政権が続いた。

しかし、2013 年 12 月の州議会選挙では **BJP** が 31 議席、および 2012 年に新しくできた庶民党が 28 議席、会議派が 8 議席と与党の会議派は惨敗した。A・ケジュリワルが率いる庶民党は蔓延する政治や行政の腐敗、2012 年に大きな政治問題となったレイプ事件、インフレの高進などによって市民の不満を吸収して生まれた市民運動が発展した政党である。惨敗した会議派は **BJP** が政権につくことを嫌い、庶民党を支持したため、ケジュリワルの庶民党政権が成立した。しかし、ケジュリワルは 2014 年 1 月には腐敗を防止するため連邦政府の「ローク・パール」法(インド版オンブズマン)よりもより厳しい内容をもつ「人民のローク・パール」法案をデリー首都圏で成立させようとして失敗したため辞任した。そのため大統領統治が敷かれ連邦政府が行政を代行している。このようななかで連邦下院選挙が行われた。

選挙戦では会議派の陰は薄く、**BJP** と庶民党の対決となった感があった。**BJP** の戦略はふたつであったといえる。ひとつはモディによる開発アピールおよび UPA 政権の失政の指摘という全インド的アピールである⁽¹⁴⁾。もうひとつが庶民党に対抗しての訴えである。**BJP** は腐敗の根絶と人々の生活インフラの改善を訴え、一方で、ケジュリワル政権の失政を挙げて攻撃し、ケジュリワルの辞任を自分勝手な裏切り行為と責めた。

会議派は相次ぐスキャンダル、そして、前年の州議会選挙惨敗のショックから思い切った戦略転換ができず、現職 7 議員すべてがそのまま立候補した。候補者は会議派デリー首

都圏政府が道路など都市インフラの整備を行いデリーの発展を支えてきたことをアピールしたが有権者の反応は鈍かった。

庶民党はインドの現状を「クローニー資本主義」(取り巻き資本主義)としてそれを体現する会議派や BJP を非難し、反腐敗を強く訴え、また生活環境改善に取り組むべき課題としてアピールした。このような訴えはとくにスラムの貧困層など従来は会議派の支持基盤であった人々に効果的であったという⁽¹⁵⁾。庶民党はまたムスリムの支持もかなり得ることができるとは思われていた。ムスリムの多数は反 BJP であるが、2013 年の時は反 BJP はまだ会議派を支持することで表現されたとされる。しかし、州議会選挙での会議派惨敗を受けて連邦下院選挙では庶民党に乗り換えると観測された。

開票結果は、庶民党は連邦下院選挙でも台風の目となることが予想されたが、結果的には惨敗した。庶民党は前年の州議会選挙の得票率 29.5%からわずかに票を伸ばし、32.9%の得票率をあげたが、他の政党と選挙協力を行わなかったため完敗した。BJP は州議会選

表2.4 デリーにおける主要政党の連邦下院選挙の実績(定数:7)

年	(議席, %)			
	BJP	会議派	庶民党	
2004	1 (40.1)	6 (54.8)	- (-)	
2009	0 (35.2)	7 (57.1)	- (-)	
2014	7 (46.4)	0 (15.1)	0 (32.9)	

(出所) インド選挙委員会 (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>) の資料より筆者作成。

(注) () 内は得票率を表す。

挙では 33.1%であったが、連邦下院選挙では 46.4%とさらに票を伸ばし、全議席を獲得した。会議派は前年の州議会選挙の得票率 24.6%からさらに支持を減らし、15.1%となりすべての議席を失った。

5. ハリヤーナー州：政党分裂のなかで開発を訴えた BJP が大勝

ハリヤーナー州はデリーに隣接しているため社会的、そして政治的にも首都圏の影響を敏感に受ける地域である。かつては農業が、そして現在はデリーに隣接するがゆえに商工業が経済を牽引し経済発展レベルは主要州のあいだでもトップクラスである。年間一人当たり国民生産は 2012/13 年度で 12 万 352 ルピー(名目値)でゴア州やシッキム州、そしてデリー首都圏など連邦直轄領を除けばトップである⁽¹⁶⁾。デリー近郊では開発が急速で人口増加が著しい。人口構成は SCs が 20.2%、ムスリムは 5.8%を占める。政治的に重要なのは人口の 20%以上を占めるといわれるジャート・カーストである⁽¹⁷⁾。ジャートは社会的結束が強く、農業で成功したコミュニティであり、ハリヤーナー州では州首相を輩出するなど政治的に強い影響力を保持している。近年この州の政党の対抗関係は、SCs やムスリムなど弱者層の支持が相対的に多いが、他の多くの階層にも支持がある会議派に対して、OBCs など中間的諸階層を代表する党、たとえば近年では 1998 年に創設されたインド国

国民衆党、そして、高カーストの支持を集める BJP という構図であった。インド国民衆党は中間的諸階層のあいだでも、とくにジャートを中核的な支持基盤とし 1999～2005 年に州政権についた。しかし、2005 年、2009 年の選挙では会議派が勝利し、それ以降、2014 年 10 月までブーピンデル・シン・フーダを州首相とする会議派が政権についた⁽¹⁸⁾。

ハリヤーナー州はすでに述べたように中央政治の動きに敏感で、選挙の争点もモディ・ウエーヴ、UPA 政権の経済政策の失敗、インフレ、腐敗など全インド的争点に沿ったものになる傾向がある。しかし、近年頻発するようになった工場での労働争議、農作物を政府公社が買い上げるときの最低支持価格の設定などハリヤーナー州独自の争点もあった。

会議派は劣勢のなかで選挙民を引きつけるさまざまな政策をとった。中央政権は第 1 章で述べたように 2014 年 3 月に北部 9 州でジャートを OBCs に認定する決定を行い留保制度の恩恵をジャートにも広げた。ジャートを会議派に引きつけようとする意図が明らかであるが、それは他のカーストの反発を買うという反作用もあったとされる⁽¹⁹⁾。また、フーダ会議派州政権は開発実績をアピールし、選挙前には貧困層への福祉政策として、たとえば土地なし層に 84 平方メートルの土地を配ると宣言するなどさまざまな政策を発表した。ハリヤーナー州の会議派は伝統的に派閥抗争が激しい。今回の選挙でも党内の分裂、抗争が顕在化し会議派を見限って BJP に鞍替えする議員がかなりみられるなど、会議派の選挙態勢は弱体であった。

一方、ハリヤーナー州 BJP のキャンペーンはモディを開発のシンボルとして前面に出し、中央と州、両方の会議派政権に対する反発の受け皿になることをねらった。またムスリム人口も小さくヒन्दゥー民族主義は左翼政党を除けばほとんど争点にならない状況で、ヒन्दゥー民族主義的言動は最小限に抑えられた。

インド国民衆党は BJP 率いる国民民主連合(NDA)の構成党であったが、2013 年に党首のオーム・プラカーシュ・チョウタラとその息子が教員採用をめぐるスキャンダルで起訴、逮捕されたため、BJP がスキャンダルを嫌い、それに反発してインド国民衆党は NDA を脱退した。しかし、インド国民衆党は、モディを連邦首相候補として支持することを表明するなど BJP との関係を重視する姿勢をみせている。一方、選挙中は州の開発を訴え、会議派州政権に対しては腐敗、治安の乱れ、その開発実績の不十分さを攻撃した。

小選挙区制のもと、分裂した政党状況を反映し

表 2.5 ハリヤーナー州における主要政党の連邦下院選挙の実績 (定数：10)

年	(議席, %)				
	BJP	会議派	ハリヤーナー人民福祉会議派	インド国民衆党	
2004	1 (17.2)	9 (42.1)	- (-)	0 (22.4)	
2009	0 (12.1)	9 (41.8)	1 (10.0)	0 (10.6)	
2014	7 (34.7)	1 (22.9)	0 (6.1)	2 (24.4)	

(出所) インド選挙委員会 (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>) の資料より筆者作成。

(注) () 内は得票率を表す。

て、選挙結果は得票率とは乖離した結果となった。BJP は 34.7% の得票率で 10 議席中 7 議席を獲得した。2007 年に会議派から分かれて創設されたハリヤーナー人民福祉会議派は BJP と選挙協力を行ったが結果を出すことができなかった。会議派は 22.9% の得票率であったが、州首相ブーピンデル・シン・フーダの息子が立候補したロータクで勝利したのみである。インド国民民衆党は 24.4% の得票率をあげ 2 議席を獲得した。見逃せないのは庶民党や BSP などの役割である。この 2 政党はすべての選挙区に候補者を立て、4.2%、4.6% の得票率をあげた。これらの政党の支持基盤はおもに会議派と競合することから、会議派が大きく不利になる状況をこの合計 8.8% がもたらしたことは確実である。

ハリヤーナーでもモディ人気は BJP の勝利に大きく貢献したことは間違いない。しかし、カーストも重要な要因となった。CSDS の調査によると階層別ではブラーマンの 52%、OBCs の 51% が BJP に投票したと推定されている。一方、会議派は SCs の 41%、ムスリムの 65% の支持を受け、インド国民民衆党はジャート・カーストの 54%、シク教徒の 40% の支持を受けたと推定される (*The Hindu*, June 26, 2014)。カーストや宗派は投票行動において依然として無視できない要素である。

6. ウッタラーカンド州：モディ・ウェーヴがもたらした BJP の完勝

ヒマラヤに連なる丘陵部に位置するウッタラーカンド州は 2000 年に UP 州から分離して創設された。この地域は高カースト人口比が平地の UP 州よりもかなり高く、識字率も 68% と高い。しかし、平地は少なく農業の人口吸収力は限られており、また、2006 年に第 1 期工事が完成したテリー・ダムなど建設されているが、地理的条件から工業化自体は厳しい環境にある。そのため、デリーなどへの出稼ぎが経済を支えている。このように平野部の UP 州と比べて社会的には発展しているが、経済的には厳しい状況から従来からこの地域は開発などの面で軽視されてきたという地域感情があり、そのため UP 州政府が推進した OBCs 留保政策への反発を機に分離運動が盛り上がった。UP 州政府、中央政府とも分離に反対せず、州の創設は比較的スムーズに行われた。州名は当初「ウッタラーンチャル」であったが 2006 年に現在の名前に変わった。人口構成は SCs が 18.8%、STs が 2.9%、ムスリムが 11.9% となっている。

この州は会議派と BJP の 2 大政党制である。現在の州政府は 2012 年に州議会選挙に勝利した会議派政権である。州首相はビジャイ・バフグナがついたが、不人気で 2014 年 2 月に連邦閣僚のハリシュ・ラウトに変わった。州での選挙キャンペーンを指揮するラウト州首相は開発重視を掲げ、一方で BJP をファシストとして非難し、会議派だけが政治的安

定を提供できるとして支持を訴えた。しかし州では 2013 年 6, 7 月の大洪水における会議派州政府の不手際のイメージがあり、人々の反応は鈍かった。一方、州 BJP では内部分裂があり州独自のキャンペーンというよりもモディ人気に依存したキャンペーンを繰り広げた。5 月初めの州内の演説ではモディは開発のみが問題を解決すると強調した。

選挙結果は BJP が 5 つの議席すべてを獲得した。ラウト州首相は完敗の責任をとると申し出たが、続投を説得された。今回の選挙を左右したのは州固有の要因もあったが、モディ・ウェーヴの影響がより顕著であったといえる。それはモディ・ウェーヴが去った 7 月 21 日に行われた州議会補欠選挙で 3 議席とも会議派が獲得し BJP はすべて敗れたことでも明らかであると思われる(*The Hindu*, July 26, 2014)。

表2.6 ウットラーカンド州における主要政党の連邦下院選挙の実績(定議席, %)

年	BJP	会議派
2004	3 (41.0)	1 (38.3)
2009	0 (33.8)	5 (43.1)
2014	5 (55.3)	0 (34.0)

(出所) インド選挙委員会 (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>) の資料より筆者作成。

(注) () 内は得票率を表す。

7. ヒマーチャル・プラデーシュ州：開発を訴えた BJP の大勝

ヒマーチャル・プラデーシュ州は 1966 年のパンジャブ州の再編成でできたヒマラヤに連なる丘陵地域の州である。州都シムラーは避暑地として知られ独立前のイギリス植民地時代は夏の首都となっていた。ウットラーカンド州と同じく高カーストが多く、識字率は 73.4% で社会的には進んでいるが、工業化は地理的制約が大きく、進んでいない。社会的弱者層の人口構成は SCs が 25.2%, STs が 5.7%, ムスリムが 2.0% となっており、SCs の割合が比較的に高いことが特徴である。

ヒマーチャル・プラデーシュ州でも 1990 年代以降、会議派と BJP の 2 大政党制状況が続いている。現在の州政権には 2012 年の州議会選挙で勝利し BJP から政権を奪還した会議派がついている。ヴィールバドゥラ・シンが州首相である。今回の連邦下院選挙でも BSP や庶民党はすべての選挙区で候補者を立てたが、選挙結果に大きな影響はなかった。

近年、この州の中心的争点は常に「開発」であった。この点では会議派も BJP も変わりなく、雇用、インフレなどが人々の中心的関心事である。シン州首相は州内のどの地方にも等しく開発努力を傾けていることを強調し人々の支持を訴えた。一方、BJP は会議派の UPA 中央政府はヒマーチャル・プラデーシュ州の開発に積極的ではなかつ

表2.7 ヒマーチャル・プラデーシュ州における主要政党の連邦下院選挙の実績(定数: 4)

年	BJP	会議派
2004	1 (44.2)	3 (51.9)
2009	3 (49.6)	0 (45.6)
2014	4 (53.3)	0 (40.7)

(出所) インド選挙委員会 (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>) の資料より筆者

(注) () 内は得票率を表す。

たと非難し、モディ BJP 政権が中央に成立することが開発を後押しするとした。モディは開発重視を前面に掲げ、会議派率いる UPA 政権はインフレも解消できず実績に乏しいとして非難した。また州は観光業などポテンシャルに恵まれていると強調し開発を約束した。

選挙結果は BJP が得票率 53.3% で 4 議席とも獲得し完勝した。得票率からみれば会議派は必ずしも完敗したわけではないが、モディ人気には有効に対抗できなかった。

8. ジャンムー・カシミール州：勢力拮抗のなかで BJP の躍進と会議派およびジャンムー・カシミール民族協議会の大敗

ジャンムー・カシミール州はパキスタンおよび中国との係争地を抱える紛争地域である。過去 3 回のパキスタンとの戦争では境界地域は戦場になった。パキスタンおよび中国と接するカシミール地域では国境は定まっておらず、「実効支配線」が了解されているだけである。1999 年のヒマラヤのカルギル地域でのパキスタンとの軍事衝突、2001 年のシュリナガルの州議会およびデリーの国会議事堂へのイスラーム分離主義過激派勢力による襲撃事件ではパキスタンとの緊張が高まった。2004 年からは関係修復、信頼醸成のプロセスが進められてきたがテロ、パキスタン側からのゲリラの越境攻撃などが起こるたびに非難の応酬となりそのプロセスは中断されるという跛行的なものとなっている。

ジャンムー・カシミール州は 1990 年代以降、カシミール地域を中心に自治権運動が激しくなるが、その背景にはカシミール地域の人々の不満がある。カシミール地方の分離主義の起源は、1947 年の分離独立の時、カシミール地域がムスリム多住地域であったにもかかわらず、当時の藩王がインドへの帰属を選択したところにある。2001 年現在、州全体ではムスリムが 67.0% を占める。もっとも、ムスリム人口はカシミール地方に集中しており、ジャンムー地方ではヒンドゥーが、チベットにつながるラダック地方では仏教徒が多数を占める。SCs は 7.4%、STs は 11.9% である⁽²⁰⁾。

伝統的にこの州のムスリムを代表する政党は、ジャンムー・カシミール民族協議会であるが、歴代会議派中央政府は同党の自治権運動を警戒し州政治に介入してきた。両者の関係は 1974 年にインディラ・ガンディー首相とジャンムー・カシミール民族協議会のシェイク・アブドゥッラーとのあいだで「カシミール合意」が結ばれ、憲法 370 条のもと、ジャンムー・カシミール州に特別な地位が認められることと引き替えに同州のインドへの最終的統合という形で一応の政治的妥協がなされた。このような経緯をもつこの州は、州独自の憲法をもつなど高度な自治権が保証されている。しかし、そのような独自性は、中央政府による州の選挙への露骨な介入、反対派の抑圧などによって徐々に侵害されてきたと

いう歴史があり、それが人々の不満を高める大きな理由となっている。

1990年代までこの州の政党政治はジャンムー・カシミール民族協議会、会議派に加えてジャンムー地方のヒンドゥーの支持を受ける BJP で織りなされてきたが、1999年にムフティ・モハンマド・シャイード⁽²¹⁾がジャンムー・カシミール人民民主党を設立したことから複雑の度を増した。2002年の州議会選挙⁽²²⁾の後には会議派とジャンムー・カシミール人民民主党は連合し、最初の3年はシャイードが次の3年は会議派のグーラム・ナビ・アーザードが州首相となり州政権を担当した。この関係は2008年に決裂し政局は混迷したが、2009年にはジャンムー・カシミール民族協議会と会議派との連立政権が成立し、州首相にオマル・アブドゥッラーが就任し、現在に至っている。両政党はUPA内で協力関係にあり、2009年、そして今回2014年の選挙でも協力しジャンムー地方とラダック地方では会議派が、他の地域ではジャンムー・カシミール民族協議会が候補者を立てた。一方、ジャンムー・カシミール人民民主党とBJPは他政党と協力を行わず、独自に候補者を立てた。

ジャンムー・カシミール州では自由公正な選挙が行われたかどうかは常に問題となる⁽²³⁾。自由公正な選挙を妨げるのは中央政府の干渉であり、あるいは治安の混乱である。前者に関しては、今回は大きな事件は起こっていないようであるが、後者に関しては今年にはいっても治安維持を難しくさせるさまざまな事件がおこり、選挙の平穏な実施を難しくした。2月9日には2001年の国会議事堂襲撃事件の被疑者で死刑に処せられたアフザル・グルの1周年を期して3日間のゼネストがおこり500人あまりが逮捕された。また4月中旬には分離主義的傾向をもつ全党自由会議のギーラニーが、指導者の逮捕に抗議してゼネストを呼びかけ、カシミール地域は生活が混乱した。全党自由会議やジャンムー・カシミール解放戦線など分離主義政党は選挙ボイコットを呼びかけた。さらに、越境ゲリラによる選挙妨害を目的としたとも考えられる襲撃事件も4月には数件起こった。

ジャンムー・カシミール州の連邦下院選挙でも「開発」は大きな位置をしめたといえよう。しかし、他州と大きなちがいはインド国家における同州の位置づけが常に問題となることである。今回の選挙ではヒンドゥー民族主義者のモディが選挙の焦点となったことからさらにその傾向は強まった。

モディは、ジャンムー・カシミール民族協議会を率いたシェイク、ファルーク、オマル⁽²⁴⁾と3代続くアブドゥッラー家の役割を州と世俗主義を破壊するものと批判し、カシミールを特別扱いする憲法370条の廃止を訴えた。また、カシミール紛争が激しかったころブラーマン・カーストのコミュニティがカシミール外に避難せざるを得なかったのは当時のファルーク州首相のせいであるとしてヒンドゥー・コミュニティの関心を買おうとした。

それに対して、州首相のオマル・アブドゥッラーはモディが憲法 370 条を見直すとした発言やビハール BJP 指導者がモディに反対するものはパキスタンに行くべきであるという発言に対して強く反発した。さらに 2002 年のグジャラートの宗派暴動への関与が指摘されるモディに世俗主義を語ることはできないと非難した (*Tribune*, April 29, 2014)。

会議派はジャンムー・カシミール民族協議会と会議派だけがモディ BJP の宗派主義を食い止めることができるとして支持を訴えた。

一方、ジャンムー・カシミール人民民主党は中央の新政権はカシミールの問題に取り組む必要があること、中央政府に対するカシミールの不信感は、カシミールの政党が中央政界でカシミールの人々の真の思いを伝えられないことにあると述べ、同党が国会に代表を送りその役割を果たす用意があると述べた。またジャンムー・カシミール民族協議会と会議派の連立政権は権威主義的で反対意見を抑圧していると批判した。

選挙の結果は会議派・ジャンムー・カシミール民族協議会連合は 6 議席中 1 議席も獲得できず惨敗となった。BJP はジャンムー地方とラダック地方の 3 議席、ジャンムー・カシミール人民民主党はカシミール地方など 3 議席を獲得した。CSDS の調査によれば、ムスリム多住地域のカシミール地方では 40% の人が現在のジャンムー・カシミール民族協議会・会議派連合州政権よりも前のジャンムー・カシミール人民民主党・会議派州政権の方が実績は良かったとし、その逆は 18% にすぎなかった。州政府の開発実績に対する評価が連邦下院選挙でも大きな意味をもったことがわかる。一方、ヒンドゥー多住地域のジャン

ムー地方ではモディが首相になることを希望する割合が 35% を占め、モディ・ウェーヴが BJP 勝利に一定の役割を果たしたことが示される (*The Hindu*, June 6, 2014)。

表 2.8 ジャンムー・カシミール州における主要政党の連邦下院選挙の実績(定数: 6)

年	(議席, %)			
	BJP	会議派	ジャンムー・カシミール 民族協議会	ジャンムー・カシミール 人民民主党
2004	0 (23.0)	2 (27.8)	2 (22.0)	1 (11.9)
2009	0 (18.6)	2 (24.7)	3 (19.1)	0 (20.1)
2014	3 (34.4)	0 (22.9)	0 (11.1)	3 (20.5)

(出所) インド選挙委員会 (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>) の資料より筆者作成。

(注) () 内は得票率を表す。

しかし投票率は 50.7% と、州・連邦直轄領のなかでは最低となった⁽²⁵⁾。これは他の州と比べるとジャンムー・カシミール州の人々が連邦下院選挙、ひいては中央政府に対して冷淡であることの現れとみることができよう。

[注]

⁽¹⁾ 本章の人口比はとくに断りがなければ、SCs, STs の人口比率、識字率は 2011 年人口センサス、宗教別人口比率は 2001 年人口センサスの数値を用いる。2011 年の州別宗教別

人口はまだ未公表である。識字率以外では、人口構成比はかなり長期に安定しているので、10年間で大きな変化はないと思われる。

- (2) たとえば、1990年に中央政府のV.P.シン首相は中央政府でもその他後進階級(OBCs)に対して政府・公的部門の採用において27%の優先採用の「留保」を設けることを発表した。中央政府の部門に関する決定にもかかわらず大きな混乱が起こった。行政部門が重要な雇用の場であることから高カーストの反発が大きかったからである。また1992年12月にはアヨーディヤーにあったムガル朝時代のモスクがヒンドゥー民族主義勢力によって破壊され、それに端を発して北インド、西インドに宗派暴動が広がった。この事件はBJPが全インド的に勢力を伸ばしていく戦略の展開のなかで起こった事件である。このようにUP州の政治は中央政界の動きに影響される傾向がある。それは反作用として州独自の政治勢力の台頭を刺激する。
- (3) 憲法356条は、州知事の大統領に対する報告に基づき、連邦政府が当該州において憲法で定められた政治過程が維持できなくなったと判断したとき、たとえば、安定した州内閣が形成されないとき、治安が混乱し州政府が機能しないときなど、州政府の機能を接収できることを定める。これが大統領統治である。
- (4) 本章における新聞の出所媒体はとくに断りがない限りインターネット版である。
- (5) 2014年6月にアーンドラ・プラデーシュ州が2分割され、新しいアーンドラ・プラデーシュ州とテランガーナー州が生まれた。これによって現在州の数は29となった。
- (6) インド政府経済白書のデータ(GOI (Ministry of Finance) 2014, Table 1.8)から筆者計算。
- (7) インド準備銀行(RBI)の2014年実質値のデータに依拠して、2005/06年度と2012/13年度の実質SDPからPoint-to-pointで筆者計算(<http://www.rbi.org.in/scripts/PublicationsView.aspx?id=15791>; <http://www.rbi.org.in/scripts/annualPublications.aspx?head=Handbook%20of%20Statistics%20on%20Indian%20Economy> 2014年9月18日アクセス)。
- (8) 中間カーストはSCsやSTsを除く「後進カースト」を事実上意味する。ビハール州におけるその台頭についてはたとえば、中溝(2012, 289-295)。
- (9) *Frontline*, April 18, 2014, “Madhya Pradesh - Saffron euphoria”.
- (10) 両者はともに長老格のL.K.アドヴァーニに近いとされ、BJP内ではモディの対抗勢力と評される。
- (11) *India Today*, April 21, 2014, “Sushma stars in Shivraj campaign: BJP's 'Mission 29' campaign to sweep Madhya Pradesh pays little attention to Narendra Modi”.
- (12) STsはほぼ0%である。
- (13) デリー首都圏は「州」としては不十分な権限しか有さない。たとえば警察行政は連邦政府が担当する。
- (14) *India Today*, April 14, 2014, “BJP poised to sweep six of the seven LS seats in Delhi”.
- (15) *Frontline*, April 4, 2014, “Delhi - It is AAP vs BJP”; April 18, 2014, “Delhi - Demographic dynamics”.
- (16) インド政府経済白書のデータ(GOI (Ministry of Finance) 2014, Table 1.8)から筆者計算。
- (17) カースト別の人口統計は1931年センサスが最後である。そのため各種の調査、推定が行われている。ジャート・カーストに関してはハリヤーナー有権者の25%を占めるといふ推定もある(*Hindustan Times*, April 9, 2014)。
- (18) 2014年10月に行われた州議会選挙では90議席中47議席をBJPが獲得し州政権をついた。
- (19) *Frontline*, April 4, 2014, “Haryana - Honour at stake”.
- (20) ジャンムー・カシミール州の現代史、政治は極めて複雑であるので、以下の諸文献で詳細は理解されたい。近藤(1994)、伊藤(2011)。
- (21) 1989年に成立した中央の国民戦線政府で内務大臣に就任。後に会議派に参加するも、1999年にジャンムー・カシミール人民民主党を設立。
- (22) この州の州議会の任期は他の州と異なり6年である。

-
- (23) この点についてはたとえば, Gauhar (2002), Lyngdoh (2004), 廣瀬 (2011)などを参照。
- (24) オマルからみてシェイク・アブドゥッラーは祖父, ファルーク・アブドゥッラーは父である。
- (25) インド選挙委員会のウェブサイト
(http://eci.nic.in/eci_main1/GE2014/STATE_WISE_TURNOUT.htm 2014年9月1日アクセス)より。

[参考文献]

<日本語文献>

- 伊藤融 2011. 「ジャンムー・カシミール州：JK 民族協議会と会議派の新たな同盟」 広瀬崇子・北川将之・三輪博樹編『インド民主主義の発展と現実』勁草書房 144-151.
- 近藤治 1994. 「インド・パキスタン紛争——カシミール問題を中心に——」岡本幸治・木村雅昭編『紛争地域現代史③南アジア』同文館 219-265.
- 中溝和弥 2012. 『インド：暴力と民主主義——一党優位支配の崩壊とアイデンティティの政治——』東京大学出版会.
- 廣瀬和司 2011. 『カシミール／キルド・イン・ヴァレイ：インド・パキスタンの狭間で』現代企画室.

<外国語文献>

- Gauhar, G.N. 2002. *Elections in Jammu and Kashmir*. New Delhi : Manas Publications.
- GOI (Ministry of Finance). 2014. *Economic Survey 2013-14*, (<http://indiabudget.nic.in/> 2014年7月14日アクセス).
- Lyngdoh, James Michael. 2004. *Chronicle of an Impossible Election : The Election Commission and the 2002 Jammu and Kashmir Assembly Elections*. New Delhi : Penguin Viking.

(注) GOI = Government of India